

令和 6 年 6 月 1 日現在

機関番号：33919

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K02559

研究課題名（和文）教師が日常的に活用できる高校生の「かかわりの力」育成プログラム開発

研究課題名（英文）Development of "Program to promote relationship in high school" that teachers can use on a daily basis

研究代表者

曾山 和彦（SOYAMA, KAZUHIKO）

名城大学・その他部局等・教授

研究者番号：50454418

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：高等学校における学校不適應（いじめ・不登校）の予防・改善策として、教師が日常的に活用できる「かかわりの力」育成プログラムの開発を目指して3年間取り組んだ。研究協力校（4校）での実践データ検証を重ね、科研費17K04888（2017-2019）にて開発した小中学校版プログラム同様、「短時間グループアプローチ」「各授業におけるペア・グループ対話」の2本柱からなるプログラム（simple program=simple & simple program）が完成し、その成果を論文、単著のなかで紹介した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

高等学校における不適應問題は「中退」「アパシー（無気力）」などに直結すると考えられる。本申請者が科研費17K04888（2017-2019）にて開発した小中学校版「かかわりの力育成プログラム」は各地の実践成果が蓄積されてきている。週1回10分で行う「短時間グループアプローチ」と各授業における「ペア・グループ対話」によって構成されるプログラムゆえに「児童生徒及び教師の負担感が少なく、日常的に継続できる」点が多く、多くの学校に受け入れられる理由である。本研究において開発した「高等学校版」が、小中学校同様、各地の高等学校で導入・展開されることで、高等学校における不適應予防・解決に寄与すると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop program that focuses on feeling of school adaptability over three years. This program is intended for highschool students, and is easy for teachers to use on a daily basis. In addition, this program consists of a short time group approach and pairwork in various classroom situations. The results of this study were published in 2023 as an educational book, and research paper.

研究分野：生徒指導

キーワード：学校不適應予防・解決 高校生 かかわりの力 短時間グループアプローチ ペア・グループ活動 自尊感情 ソーシャルスキル

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

不登校・いじめ等の学校不適應問題は義務教育段階に留まらず、高等学校においては「アパシー（無気力）」「SNS等のネットいじめ」等の問題にも直結する悩ましさを抱えた問題である。代表者が科研費（17K04888；H29～R1）助成により開発した「かかわりの力」育成プログラム（小中学校版）は、全国約30の小中学校で実践が展開され、その効果を蓄積中である。同プログラムは、(1)週1回10分の短時間グループアプローチ実施、(2)各教科等における「ペア・グループ対話」導入、という2本柱によって構成されており、「児童生徒及び教師にとって負担感が少なく、日常的に継続できる」ことが多くの学校に受け入れられる理由であると考えられる。それ故、同プログラムをベースに、高校生の心身の発達段階を考慮した「高等学校版」も開発可能であるとともに、高等学校における不適應予防・解決に寄与すると考えられることから本研究に着手した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、教師が日常的に活用できる高校生の「かかわりの力」育成プログラム開発である。なお、「かかわりの力」という用語について、代表者は自身の実践及び研究知見から「自尊感情」「ソーシャルスキル」の2つをその主たる要素と捉え、これまで研究を重ねてきている。「かかわりの力」に焦点を当てた研究としては、構成的グループエンカウンターやソーシャルスキル・トレーニングを活用した研究が散見されるが、数年間の継続実践として展開し、その効果を検証した研究は見受けられない。その理由としてOECDによる国際教員指導環境調査(TALIS)結果が示すように、多忙感を強く抱く教師にとっては新たな実践に踏み出すことへの躊躇があるからではないかと考えられる。それ故、本研究では、従来の小中学校版プログラム同様、「週1回10分の短時間グループアプローチ」「各教科等における『ペア・グループ対話』」の2本柱で構成され、教師・生徒の取り組みへの負担感が少なく、高等学校においても実践しやすいプログラム開発を目指すものである。

3. 研究の方法

高等学校版プログラム「試行版」は、代表者の先行研究として、令和2年度に熊本県A校（抽出3クラス）の実践から開発した。本研究では、プログラム実践協力校にて実践及びデータ収集を通して、効果検証を行った。3年間の経緯を以下に記す。

<1年次（令和3年度）>兵庫県B校における実践と検証

B校（抽出4クラス）におけるプログラム実践、及び効果検証を行った。従来の研究同様、効果指標として「学級診断尺度Q-U」¹、「生徒自由記述」を設定した。生徒自由記述には「仲良くなかった人と仲良くなるきっかけができて楽しい」「相手のことや自分のことを知れたり、自分に自信をつける材料になるのでとてもいい機会になった」等の感想が多く記され、「タイム」には「かかわりの力」促進効果があることが示唆された。しかし、Q-Uでは「友人関係」等の項目において統計的変容が認められなかった。その理由として、第一には「タイム」が不定期実施であり、一回一回が打ち上げ花火的な「お楽しみ活動」に留まってしまったのではないかと。第二には「タイム」で大切にしたい「挨拶、話の仕方・聴き方、自他への気づき」がその時間のみで閉じられ、生徒に「馴染む」ところまで至らなかったのではないかと推測された。高等学校における学校不適應予防・解決に向け、「タイム」がもつ可能性は見出されたと考えられるが、2年次には上述の課題に焦点を当て、新たな対象校による実践・検証を進めることとした。

<2年次（令和4年度）>愛知県C校、大分県D校における実践と検証

C校、D校を新たな実践校として依頼をし、プログラム実践及び検証を行った。C校はヒューマンサービスを学ぶ専門高等学校であり、プログラムの開始は10月からであった。一方、D校は、令和3年度より大分県下に全面導入・実施された「人間関係づくりプログラム」として、代表者が提唱するプログラムに取り組み、2年目を迎えた普通高等学校である。そこで、プログラム効果を検証するため、C校がプログラムを開始する直前の7月に、両校生徒の学級適応状況の比較検討を行った。対象生徒は、両校とも1・2年生とし、効果測定の指標はQ-Uを用いた。

表1に記した結果から明らかになったのは、プログラム導入2年目のD校生徒の適応状況が、導入前のC校に比較し、良好であるということであった。具体的には、「教師関係」「学級雰囲気」「承認」の3項目について、統計的に有意な差が認められた（D校>C校）。「進路意識」のみC校の得点は高いのは、専門高等学校と普通高等学校の違いではないかと思われる。また、プログラムに関する独自アンケートを作成し、D校生徒に実施したところ、その中の1項目；「タイムは楽しいですか？」に対し、90%弱の生徒が「楽しい」と回答しており、高校生にとっても十分に受け入れられる「かかわりの力」育成プログラムであることが示唆された。研究の最終年次には、これまでに収集した4校のデータを整理・分析することにより、高校生の「かかわりの

力」育成プログラム」完成をめざすこととした。

表1 C校とD校のQU得点平均値の統計比較結果

QU項目	C校(136名)	D校(205名)	t値	有意水準
教師関係得点	14.17	15.06	2.431	5%
学級雰囲気得点	15.2	16.34	3.288	1%
進路意識得点	17.61	16.16	4.495	1%
承認得点	33.15	35.53	2.853	1%

<3年次(令和5年度・最終)>

研究の最終年度(3年次、令和5年度)は、2年次同様、C校、D校に対して、プログラムを実践し、質的・量的データ収集を重ねた。その結果、特にD校の実践が全校体制として整い、生徒の学校適応状況が良好であることが明らかになったことから、これまでに収集した対象3校(A・B・C校)データと比較・分析を行った。本研究の目的は、教師が日常的に活用できる高校生の「かかわりの力」育成プログラムの開発であり、既の開発済みの「小中学校版」プログラム同様、「週1回10分の短時間グループアプローチ(タイム)」「各教科等における『ペア・グループ対話』(トーク)」の2本柱を想定し、高校生の心身の発達段階(特にキャリア教育の視点)を考慮した「試行版」を用いて研究実践を行ってきた。対象3校の教師から挙げた声として多かったのは「実施時間確保の難しさ」である。この声に最も効果的に応える形を生み出したのはD校であった。D校は「月2回、水曜日の清掃をカットし、その時間にタイムを実施する」という方針を立て、実行したことで、生徒の学校適応状況も実践進行に伴いプラス変容を示した(表2)。3年間に及ぶ対象4校の協力があつたからこそ、目的とした「高等学校版かかわりの力育成プログラム」の一つのモデルを構築することができたと考えている。コロナ禍を経て、生徒の不適応状況が悪化の一途をたどる学校現場の状況において、本研究の成果であるプログラムは生徒支援の具体方策の一つになるのではないかと考えられる。

4. 研究成果

高等学校における不適応予防・解決の具体的アプローチとして、教師が日常的に活用できる高校生の「かかわりの力」育成プログラム開発を目指し、3年間取り組んだ。実践協力校(4校)での収集データ検証を重ねた結果、月2回10分の「短時間グループアプローチ」「各授業におけるペア・グループ対話」の2本柱からなる高等学校版プログラムが完成し、その成果への途中経過は単著(書名; 超多忙でも実践できるシンプル・プログラム. 2023)の中にも紹介した。研究論文としては「高等学校における不適応予防・改善をめざした「かかわりの力育成プログラム」の開発」(名城大学総合教育研究所. 2021) 研究発表としては「高等学校における短時間グループアプローチ実践と効果の研究」(日本教育心理学会総会ポスター発表. 2022)等がある。

表2 D校のQU満足群等の年度別変容の結果

	学級生活満足群	非承認群	侵害行為認知群	学級生活不満足群
R5 1回目	76.1	9.4	7.5	6.3
R4 1回目	65.0	12.4	7.5	4.0
R4 2回目	72.6	10.6	8.4	6.6

※ すべて%を記載

* 令和4年から5年にかけて、「学級生活満足群」の数値が伸びている。

「高等学校版かかわりの力育成プログラム」の タイム D校作成モデル

1. 名称：『〇〇タイム』

2. 目的： ペアやグループでの活動を通して多くのクラスメイトと触れ合い、他者理解や自己理解を深める。
生徒の良好な人間関係を構築し、いじめ・不登校をうまない魅力ある学校づくりを推進する。

3. 実施時間

月 1～2 回、10 分程度

火曜日（予定）①エクササイズ実施日 16:05～16:20（清掃カット）

②アンケート実施日 終礼時

4. プログラムの具体的な流れ

〈エクササイズ導入時〉

〈2回目以降〉

ルール・めあての確認	2分	ルール・めあての確認	1分
モデリング（教員・生徒）	2～3分	エクササイズ	2分
エクササイズ	1～2分	フリートーク	1分
フリートーク	1分	シェアリング	1分
シェアリング	1分	振り返りシート記入	1分
振り返りシート記入	1分		計6分
	計8～11分		

5. 基本ルール

ソーシャルスキル（社会性）を育むためのルール

①「お願いします」と「ありがとうございました」のあいさつをする。

② 相手を見て、うなずきながら聴く。

③ 否定せず、最後まで聴く。

※答えたくない場合は、パスしてもよい。

6. 実施するエクササイズの種類

「アドジャン」「二者択一」「1分間スピーチ」「いいとこ四面鏡」など ※必ずシェアリングを行う。

7. 準備物

- ・掲示するもの：（進行表に掲載）基本ルール、プログラムの流れ、エクササイズの仕方やお題、めあて
- ・生徒：タブレット（エクササイズシート配信、ふりかえりシート入力）
- ・教員：タイマー、進行表（教員 Teams に配信）

8. 年間計画

令和〇年度『〇〇タイム』年間計画				
実施時期	内容	めあて	構成人員	
1 学 期	4月 (15) 26	オリエンテーション（可能 であれば遠足と運動） アドジャン	『〇〇タイム』の目的、具体的取り組み 内容を知る。 流れを知る。クラスの友だちのことを知る。	グループワーク グループワーク
	5月 10 24	アドジャン WEBQU1(1・2年)	クラスの友だちのことを知る。 自分のことを知る。	ペアワーク 個人
	6月 14	二者択一	流れを知る。クラスの友だちのことを知る。 自分のことを相手に伝える。	3～4人グループワーク
	7月 5 19	いんどこ四面鏡 校内アンケート1	流れを知る。 友だちの良いところを見つける。 自分の良いところに気づく。 1学期の活動をふりかえる。	4～5人グループワーク 個人
2 学 期	8月 30	アドジャン	自分のことを相手に伝える。 相手の考えを受け入れる。	ペアワーク or 3～4人グ ループワーク
	9月 6	アドジャン	自分のことを相手に伝える。 相手の考えを受け入れる。	ペアワーク or 3～4人グ ループワーク
	10月 18	二者択一	自分のことを相手に伝える。 相手の考えを受け入れる。	ペアワーク or 3～4人グ ループワーク
	11月 8 15	1分間スピーチ WEBQU1(1・2年)	話を簡潔にまとめて相手に伝える。 相手の考えを受け入れる。 自分のことを知る。	ペアワーク 個人
	12月 6 20	いんどこ四面鏡 校内アンケート2	友だちの良いところを見つける。 自分の良いところに気づく。 2学期の活動をふりかえる。	4～5人グループワーク 個人
3 学 期	1月 17	アドジャン or 二者択一	自分のことを相手に伝える。 相手の考えを受け入れる。	3～4人グループワーク
	2月 7	1分間スピーチ	話を簡潔にまとめて相手に伝える。 相手の考えを受け入れる。	ペアワーク
	3月 14 22(水)	いんどこ四面鏡 校内アンケート3	自分や友だちの良いところに気づく。 友だちからの評価を受け入れる。 1年間の活動をふりかえる。	4～5人グループワーク 個人

※クラス主体で実施し、プログラムの周知徹底を図る。担当教員はHR担任に限定しない。可能であれば、学年
内で人員の変化、全校縦割りの活動を入れる。

※エクササイズの種類とお題は実施時期によって検討・変更する。（教職員・生徒から意見募集）

※WEBQUの実施予定：1回目5月、2回目11月

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 曾山和彦	4. 巻 21
2. 論文標題 高等学校における短時間グループアプローチの実践	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 名城大学教職センター紀要	6. 最初と最後の頁 75 - 85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 曾山和彦
2. 発表標題 高等学校における短時間グループアプローチ実践と効果
3. 学会等名 第64回日本教育心理学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 曾山和彦
2. 発表標題 高等学校における短時間グループアプローチ実践～実施校・未実施校の比較
3. 学会等名 第65回日本教育心理学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 曾山和彦
2. 発表標題 高等学校における不適応予防・改善を目指した 短時間グループアプローチの実践
3. 学会等名 第63回日本教育心理学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 曾山和彦	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ほんの森出版	5. 総ページ数 144
3. 書名 超多忙でも実践できる！スリンプル・プログラム～週1回10分の「タイム」で「かかわりの力」を育てる	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------